

蛇籠の目

能村 研三

随筆賞

昨年、「沖」創刊四十五周年を記念して、初めて随筆集『飛鷹抄』を刊行したが、これが日本詩歌句協会の随筆大賞に選ばれ、九月二十四日に授賞式があった。

日本詩歌句協会は、詩、短歌及び俳句（詩歌句）のそれぞれの魅力を結集し、広く一般市民に伝えるための文芸講座及びイベント等の企画をし、詩歌文芸の発展に寄与することを目的として発足した。

この運動を提唱したのが詩人の宗左近氏で、今年には宗さんが亡くなって十年目にあたり、市川に詩碑が建立された年でもあり、そんな縁もあることから、快く賞をいただくことにした。

宗さんは日頃から詩歌の一つのジャンルに捉われることなく、文芸全般が広く交流することを提唱された方で、宮城県の中新田賞（現・加美町）や、市川市の市民文化賞の制定、

忽然と今日十本の曼珠沙華

直汲みの新酒を喉にただけり

野分晴羽毛の絡む蛇籠の目

蓼科・駒が池

ななかまど九十九折なす紅尽し

奔放な走り根跨ぎ風澄めり

千葉市・青葉の森

整へぬことが爽気と生態園

秋天へ手足つなぎの像翔くる

里見公園・じゅんさい池

登高の途次に歌碑句碑そして詩碑

原点は雨後新秋の「枯野」句碑

豆柿の手桶に灯る躍り口

市川でも俳人、歌人、詩人、その他文筆家が一同に会する会を定期的に開いて下さった。

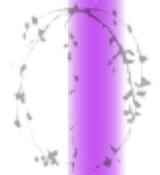
宗さんに賛同し私も数年前から入会し、本年六月には宗左近さんについて講演をした。

『飛鷹抄』に対して、選考委員のお一人の坂口昌弘氏に「結社誌『沖』に書いた十六年分の随筆と三年分の時評を纏めている。多くは市川市と文化関係の仕事を通じての体験談であり、毎回簡潔に纏めている。例えばエッセイ『宗左近宇宙』では二月宗氏の自宅に通い文化人展を開催したことが書かれている。貴重な平成俳句史の背景となっている」と評していただいた。

当日は千田百里同人会長、辻美奈子編集長をはじめ「沖」からも多くの方々がお祝いにかけてくれた。

私個人に頂いた賞は「俳人協会新人賞」以来で、少し面映ゆい面もあったが嬉しいことであった。

蒼茫集



鍵 穴 安居正浩

鍵穴を抜け月光の町に出る
煙茸けむり出しても消えられず
故郷に縁なくなる冬瓜汁
葡萄棚光りと陰の交ざりあふ
次の世へ手ぶらで行かん衣被
盆道を呆けし父の迷はぬか

京の辻 千田 敬

山車廻すきしみ百遍京の辻
虚と実のあはひに咲いて黴の華
一滴に百音聴くも秋の水
新蕎麦を待つ間水車のよどみなし

字余りと言ふべし秋のサンガラス
卓袱台の瑕は家暦よ秋の暮

許すといふは 荒井千佐代

海霧深き隧道三つ夕弥撒へ
葎の花許すといふは難しき
栈橋と船腹こすれ合ひて秋
秋昼のオラシヨは寄する波のごと
纜の張りては緩ぶ盆の月
畦行くや来るな来るなと曼珠沙華

パンと檸檬 矢崎すみ子

一皿にパンと檸檬のある平和

銀の夜を濃くしたる貝割菜
掌中に壺中の天や秋蛩
七つ星夜の大海へ秋零す
遠浅の銀波に秋の貝一つ
武士の塚山霧の尾の奔る

結球す 林昭太郎

百僧の一斉に立つ涼しさよ
クリツプに微かな磁力鳥わたる
目薬の雫を待てば秋の風
かちかちの雑巾が待つ休暇明
八朔や家の中にも風の道
星飛んで高原キャベツ結球す

至 福 吉田政江

新涼や枕をぽんと裏返す
心太反論いつも腰くだけ
みつよつで足りる至福よ衣被
つつしみの紅より昏るる酔芙蓉

噓せつたき香や常陸野の中稲刈
優駿の色なき風を競り抜けし

白木槿 森岡正作

ふるさとは遠かなかなの渦の中
稲雀甲斐より攻めて来たりけり
滅びにも輝きのあり白木槿
毒茸踏まれて美しき毀れやう
燈火親し古机には肥後守
葛や葛絡まることに倦みてをり

超 越 辻美奈子

九月くる真白きものに握り飯
葛あらし風に背後のありにけり
つくつくぼふし絶交の三日ほど
桃の香の桃の形を超越す
A r o u n d ・ 50 残暑の顔をありありと
木槿落つ地下水脈と響きあり

シンフォニー

望月晴美

秋口といふやはらかき響きかな
森はいま色なき風のシンフォニー
萩の風もののあはれを揺らしぬる
やさしさに色ありとせば芙蓉とも
市川市より敬老日どきりとなりし「祝」受く
台風の去り陽のわつと若返る

いろめく

千田百里

藤森すみれさん勇退
二十年や裾野育み爽やかに
なほ遙かめざす裾野や天高し
色烏にいろめく大正ガラスかな
大川のやがては天の川となる
晩菊や木偶人形は地を踏まず
次女宛兄と我隔つる秋の簾かな

吃水線

杉本光祥

バイクの日いな俳句の日涼新た

雲海の吃水線に八ヶ岳
登高す日本海の見ゆるまで
秋雨にしかと根付けり御柱
秋思なほ上り樞に腰かけて
缶詰を開けるに難儀防災日

足早に

宮内とし子

足早に銀座は秋のくるところ
二百十日パンかライスか問はれをり
少し巻きすこし傾ぎて秋すだれ
うぶすなの大河を渡り盆の月
膝折ればこどもの視線庭花火
油揚げに裏表あり敬老日

尺貫法

甲州千草

氷店尺貫法を生き活きと
校門の門台風と対峙

兄弟を正すバリカン二学期へ
にはとりを叱る媪や紫蘇は実に
群れ鳥の啄む夕日刈田あと
秋灯のはしやぐ銀座のにはたづみ

秋 爽 田所節子

秋爽の空気踏みゆく新暈
紺碧の風切つてゆく秋の航
時止まるやうに母座す白露かな
秋蝶の草に動悸を鎮めをり
鮎詰の秋思の顔と乗り合はす
「あれ」「それ」で会話の育つ良夜かな

走り根 久染康子

裏海へ筋金入りの瀧一本
羽織るもの少し厚目に月見船
秋螢膝の高さを飛び交へり
赤松の幹ぴりぴりと秋日濃し

走り根に掛けて色無き風を聞く
病み抜けて初秋風を纏ひけり

分譲住宅 菅谷たけし

油蟬今更何を急かすかな
遠く鳴く土鳩のこゑや晩夏光
かつて世に軍歌てふあり芋の露
葛咲けり街道跡といふ窪地
毒茸白さ競ひて妖婦めく
類型の分譲住宅いわし雲

靴合はせ 成宮紀代子

手の甲のざはりと老ゆる日焼して
肩の尻を更にせり上げ揚火花
新涼や黒松保護に署名して
よそふてふ言葉美し栗御飯
眩驚の像秋天に何を吼ゆ
ひるがへる朴の落葉に靴合はせ

潮鳴集



負けず嫌ひ

内山花葉

宿題半ば赤とんぼ増えてをり
トマトのやうな笑顔で負けず嫌ひなり
蓮見舟ぐいと紅蓮の森分くる
魚網干す泡立草のまぶしき日
台風来ずしり立ておく広辞苑

蟬の時間

中島あきら

はたと蟬の時間に谷のあるごとく
木の影を脱いで晩夏の蝶となる
遠雷や肩組みなほす山の樹々
声かけてより蜻蛉に慕はるる
秋暑し仮面殖やしてゐるやうな

月涼し

篠藤千佳子

恐竜の背骨なだらか月涼し
声といふ個性つくづく蟬時雨
立秋や両手を上げて滑り台
目覚しを止める手のひら涼新た
砂浜に打ち上げられし残暑かな

落日の色

能美昌二郎

落日の色吸ひつくす唐辛子
地のほてり残りて虫の夜となりぬ
青畳足裏で知る秋の声
一合の酒と秋刀魚の刺身かな
身長は登四郎ゆづり竹の春

案山子 七種年男

稲刈つて村ぢゆうが広くなる午後
どぶろくやイエスターを聴きながら
刈取られ途方に暮れてゐる案山子
賜日和若狭に残る塩の道
木偶姫の木の声で泣く木染月

誕生日 栗原公子

鳳仙花はじけて古稀の出来心
登高や町ジオラマのごとくあり
秋風や連ねて軽ろき千羽鶴
夕かなかな擦り傷の児におまじなひ
水澄むや亡き夫にくる誕生日

媚葉 町山公孝

爽涼や岸边にぼつと常夜燈
祭笛寅さん像の動きたさう
初嵐何もなさざる一日よ
秋澄むや避けて通れぬ六本木
秋の夜のシングルモルトてふ媚葉

赤とんぼ 浅野吉弘

古いほど記憶鮮明赤とんぼ
土木課の女性の技師や赤とんぼ
測量の基点の杭に赤とんぼ
太平洋は雲湧くところ烏賊を干す
野分去る刺繍の裏の縫れ糸

室外機 峰崎成規

室外機路地の残暑を膨らませ
ぐい呑みは備前と決めて新走
瀬を経たる水のまろみや鮎落つる
偏らず世を円く見る蜻蛉の眼
はらわたの苦味は履歴秋刀魚食ふ

飛ぶもの 大沢美智子

燃えきらぬ夕焼を呑み日本海
八月や終りの速き砂時計
飛ぶもののなべてまばゆき水の秋
へくそかづらたぐれば大樹また大樹
頬杖を解くや鷓の来てをりぬ

沖作品



能村研三選

爽やかに山の日の山連なりぬ
初秋の声聞くやうにひらく文
流木に砂のしめりや秋の浜
帰省して多弁の家系の中にある
群青の夜の帳や花火待つ
曼珠沙華燃えて近衛師団跡
爽籟の沖へ刻つげ風見鶏
八月のあの日あの子とけんけんば
潮騒の風に研がるる青蜜柑
中能登の荒行僧や滝開
伏して児はファールとなる夏休み
帯草音に出でざる風孕み
干瓢を干すや日の研ぎ風の研ぎ
骨壺の姉ぎゆつと抱く萩の坂
涼新た山湖に艦音風の音

埼玉

須賀ゆかり

市川市

藤代 康明

千葉

下村 辰枝

ミシン目で紙切る音や涼新た
ヨーグルトにジャム沈みゆく九月かな
秋めくや何か出来さうな気にして
小さく振るさよならの手よ秋の駅
秋灯の増ゆ東京に近づきて
月今宵語り出すやう杜甫季白
桔梗のひらくや切絵開くごと
言霊を沈めて秋の泉かな
百歳の姑の起居美し枝垂れ萩
うたげなる海のしぶきやペーロン祭
木漏れ日に色を返すや薄紅葉
フルートを吹く裸婦像や小鳥来る
秋晴やフリー切符の途中下車
猪垣の破れ目潜り子の帰る
数珠玉のこぼるる色となりけり

市川市

小川 流子

長崎

田川美根子

千葉

塩野谷慎吾

沖作品 15句選評

*
能村研三

曼珠沙華燃えて近衛師団跡 藤代 康明

皇居にほど近い北の丸公園に近衛師団跡がある。現在は近代美術館になっているが、明治維新以後政府が「天皇の警護」を名目に近衛師団の兵営地が設置された。江戸城の北の丸があったところで現在は緑豊かな公園として散策や森林浴、ジョギングなど市民に親しまれる公園である。北の丸公園からお堀の皇居側の土手には真つ赤な曼珠沙華が咲き始める。都内でも有数な曼珠沙華の群生地としても知られている。

干瓢を干すや日の研ぎ風の研ぎ 下村 辰枝

干瓢の収穫期は六月ごろから九月ごろまでで、収穫を終えた干瓢は熟練の人たちの職人技でシュルシュルと剥かれ、白い帯はひとつひとつ丁寧に竿に掛けられ、天日干しにされる。夏の強い太陽の日差しと適度な風にさらされる。「日の研ぎ」「風の研ぎ」のリフレインが細やかな作業を描写している。

秋めくや何か出来さうな気にして 小川 流子

夏のうんざりする暑さから開放されると、人間は俄かにやる気が出てくる。暑さという肉体的環境の変化だけでなく、一年も後半にさしかかり、今まで躊躇していたことも、心を入れ替えて少し積極的に動いてみようという心が定まる。十月からは年度で言えば下半期が始まる訳で、何か出来さうな勇気が湧いてきた。

〈以下略〉

爽やかに山の日の山連なりぬ 須賀ゆかり

今年から八月十一日が「山の日」に制定され、国民の休日となった。「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」ことを趣旨としているそうだが、七月の「海の日」と共に、夏休みに相応しい休日として親しまれている。「山の日」は初秋の季語となるわけだが、まだできて間もない祝日なので、季語としての力は未知数である。しかし、「山の日」という初ものの季語には、俳人たちが飛びついた。季語のイメージが固定されない間に自由に句づくりができるためであろうか。須賀さんは、「山の日」の季語の本意が確立されていないので「爽やか」という初秋の季語を敢えて用いた。「山の日」の山々は、自分たちが主人公の祝日を、肩を並べながら誇らしげに連らなりこの日を祝っているようであった。